

イスラームの包括的理解…インドネシアのムスリムとの対話

加藤久典

※本稿は2016年10月3日、東京・新宿区のTKP市ヶ谷カンファレンスセンターで行われた講演をまとめたものです。掲載にあたり、講演タイトルは講師によって変更されています。

はじめに――

フィールドから見えてくる真実

ただいまご紹介いただきました加藤と申します。私は、外国に約二十年間住み、二〇〇九年に帰国しまし

た。その間に、勉強をしたり働いたりして得たことをお話しできればと思っております。具体的には「フィールドリサーチ」です。私はフィールドリサーチチャーターありまして、いろいろなところに行って自分の目で確かめて、それを論文にして発表していますので、皆さんにもぜひ私と一緒に旅をしたような気持ちになっていただければと思います。

きょうは、私がフィールドにしている東南アジア、特にインドネシアのことを主にお話しします。日本にもインドネシアから観光客がたくさん来ており、ムス

No Image

加藤中央大学教授は、シドニー大学博士課程修了後、デ・ラサール大学（マニラ）やナショナル大学（ジャカルタ）などで教鞭を執ってきた

リム（イスラーム教徒）のレストランビジネスなども注目されています。今後、経済理論や経営学だけでなく、イスラームの方の考えや暮らしについて知ることも、本当のグローバルな人間には必要なことだと思っていますので、ぜひたくさん学んでいただきたいと思っています。

さて、例えばここにスイカの絵があります。丸を描いて、色はグリーンで縞があります。ところが、スイカを一回切ると実際には赤色が出現します。赤だけではなくて黒い種も現れます。白っぽい色も出てきます。表面を見ただけではそのようなことはわからないわけです。

私が申し上げたいことは、ものごとを考えるときに、まずは見たまま聞こえたままの「事実」が存在するということです。これは疑いようもなくあるわけで、例えば、ここに花があり、何十人の方がここにいらっしやるのも事実です。そして、もう一つ重要なのが「真実」です。事実と真実。事実は見えるもの、または聞こえるもの、触れられるものです。しかし、真実は隠れているので見えないことが多いです。スイカの例でおわ

かりのように、中に赤色があることは外から見ただけではわかりません。表層と内実の関係です。

イスラームを包括的に理解する意味はここにあるのではないかと思っています。真実と事実をしつかりと自分で認識していく、これがあつてはじめてこの連続講演会のテーマである「持続可能な未来と宗教」にながつていくのではないのでしょうか。真実と事実の認識がなければ、ただ聞いたことや見たことばかりを気にしてしまう。ですから、フィールドに出ることは、イスラームをはじめ宗教や人の心を見つめ、将来の人類のあり方を決める上でも大変重要なことではないかと思っています。もちろん、本から考えることも大切ですが、それを超えるものを目指したい。学生にも言いませんが、私たちはフィールドワーカーでなければいけません。フィールドワークと言うと飛行機に乗ってどこか遠くに行かなければいけないのではないかと思われるかもしれませんが、その必要はありません。私の好きな作家の言葉に「千キロはなれたところに行くということとは、自分の心の中を千キロ歩きまわることでも

ある」(なだいなだ著『あなたへの手紙 娘の幸福のためのカルテ』角川文庫)とあります。つまり、実際に旅に出なくても、自分の心の中で「真実を見よう」という気持ちがあればわかるのではないか、という意味に私は捉えています。ぜひ、皆さんも心の中を千キロ歩き回るぐらいの旅に出ただければと思います。

イスラームは危険な宗教なのか

二〇一五年の一月に、ジャカルタでデモ行進がありました。「ムハンマドを侮辱した者に死刑を」というスローガンを掲げて、ムスリムがデモ行進をしたのです。これとちょうど同じころ、パリでもデモ行進がありました。スローガンは、「私はシャルリー」。二〇一五年一月七日、フランスの雑誌社「シャルリー・エブド」でテロがあり、十二人が亡くなりました。パリの人たちはその雑誌社を支持するために、「テロリズム反対だ」「私はシャルリーだ」とアピールしたのです。一方で、ジャカルタでは正反対のデモが起こっていたわけです。これを事実として見ると「やはり、イスラームは危険な

「い宗教だ」と思います。世界中のマスコミもそのように報道するわけです。

「シャルリー・エブド」は非常に有名な雑誌で、風刺漫画をたくさん載せますが、そこに何度もイスラームをからかうようなものを載せてきました。素っ裸のムハンマドを描いて載せた際には、本当にはばかられるほど局部を露出させています。からかって「ムハンマド、スターの誕生」とフランス語で書いています。『コーラン』の絵を載せた際には、「コーランで銃弾は止められない。コーランなんてクソくらえ」と書いています。こういうものを二〇一二年にも出していたわけです。

もし例えば、ゴータマ・シッタールタや日蓮上人、私たちが大変尊敬する人、大切な人がこのようなかたちで描かれたら、皆さんはどう感じるでしょうか。ここで問題になってくるのは、「表現の自由」と「信仰の尊厳」だと思います。フランスの雑誌社は、「どんなことを書いてもいい。それが権利だ」と思って発行したわけです。サミュエル・ハンチントンというアメリカの有名な政治学者が、一九九〇年代に『文明の衝突』

という本を書きました。彼が言うには、キリスト教を母体とした西洋文明と、イスラームの文明、儒教の文明、日本の文明、アフリカの文明などは、人権、民主主義、平等主義の観点では相容れないところがあると。人権、民主主義、平等主義は西洋文明で鳴り響くけれども、イスラームにとってはそんなことはないのだ、と彼はこの本の中で論じました。ところが、人権、民主主義、表現の自由を前提にして、西洋社会はこうした侮辱的なものまで描いてしまうわけです。しかし私は、それを見せられた側の人間はどう思うかという想像力が欠如しているのではないか、と思っています。

また、このパリとジャカルタの対照的な構図は、「文明」対「野蛮」の構図と重なってきます。パリの人たちにとって、ジャカルタでデモをしていた人たちは野蛮人であるわけです。ムスリムには幾つもの義務があります。ジャカルタの人たちは、ムハンマドを侮辱した人を実際に死刑にはしないでしょ。また、できないでしょう。しかし彼らには、ムハンマドを侮辱した者に対しては極刑を与えるべきだということを訴えて

いかなければならない義務があります。

ムハンマドが生きていた千四百年以上前の時代に、ある男の使用人でその男の子どもを産んだ女が常にムハンマドのことを悪く言っていました。男は、聞くのはいやだと思いつつ我慢していました。ところが、それが余りにも続くので男はその女を殺してしまいました。そして、「人を殺してしまった」とムハンマドの前に出て行きます。「自分は人を殺してしまった、なぜならば、私が大切に思っている、神から遣わされた預言者であるムハンマドを侮辱したので、我慢できなかったのです」と彼が言ったとき、ムハンマドは、「その女の血は許されたものである」と答えたと言われています。つまり、自分を侮辱したものは死に値するということをお伝えしたのです。そのため、ムハンマドや神アッラーを侮辱してはならず、侮辱した者には極刑が与えられることが教えとしてあります。

そして、『コーラン』の中にも「神とその使徒に苦痛を与える者には、神が現世と来世において呪いをかけ、辱しめの懲罰を準備したもう」（三三章五七節）と説かれ

ています。「『コーラン』の引用はすべて中央公論社『コーラン』Ⅰ・Ⅱから」

私が専門とする社会人類学は、本の中の理論や考え方と自分のフィールドをすり合わせながらやっていく学問で、神学ではありません。神学は教えの言葉を研究していく学問だと思いますが、私たちの学問の領域では、言葉の背景からイスラームを考えます。六一〇年にイスラームがこの世界にもたらされたと言われていますが、それ以前の無明の時代（ジャーヒリーヤ）には、大変野蛮なことが起こっていました。イスラームが遣わされる前は、女性は物同然で金と力があれば何十人も女性を侍らせてかまいませんでした。女の子が生まれると、土に埋めてしまう風習もアラビアにはありました。イスラームが遣わされる以前は、種族と種族の間の殺し合いが非常に多かったようです。一やられたら十返す。しかし、イスラームがもたらされた後には、そういうことが制限されていきました。

ですから、社会人類学的にみると、自分を最高のものとして権威づけることによって世の中を改革してい

こうというムハンマドの意図があつたのではないかと思ひます。神学者や政治学者ですと、また違う解釈になると思ひますが。

ムスリムの義務（五行と六信）

ここで、ムスリムの義務について話しておきたいと思ひます。まず重要なのは、イスラームの聖典『コーラン』、それからムハンマドの言行録です。ムハンマドの言行を記録したものを「ハディース」といい、ムハンマドによる慣行や決定を全体として「スンナ」といいます。それらに従つて生きなければいけないのがイスラームです。

その中でも特に重要になるのが、五つの義務行為「五行」です。

第一に、信仰告白（シャハーダ）です。つまり、「アッラー以外に神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒である」、これを証言することがまずムスリムとして大事な義務になります。

第二に礼拝（サラート）です。一日五回、夜明け前、昼

午後、日没後、寝る前に祈ります。ただし、旅行中に電車に乗っているときや体の具合が悪いときなどはできないので、スキップしてもいいことになっています。

第三に、喜捨（ザカート）です。いわゆる寄付のことですが、お金が流通していなかつた時代から農産物などが寄付されてきました。その場合は、自分が収穫した一〇%をムスリムのコミュニティのために還元しなければいけません。金銀またはお金の場合は、二・五%を社会に還元します。

第四に、断食（サウム）です。イスラームのカレンダーの九カ月目をラマダーンといいますが、この時期は日の出から日没まで飲み食いをしてはいけません。厳格な人になると、唾まで吐き出します。私も大学やいろいろなところで教えていたのでわかりますが、偉いですね。先生たちは休みもとらずに教えますし、私も断食月には、彼らの前では水を飲まないようにしています。彼らは強いです。「大丈夫です」と言つて、やっています。強い思いがあるのでしょう。私がイスラームに興味をもつたのにも、断食が大きく関わつていま

す。友人は、「自分がどれだけ良いムスリムになれるかを試し、我慢する力を養うため」、また「貧しくて食べることができない人々と同じ体験をして、他者に対する思いやりを学ぶため」と言っていました。そういう思いで、彼らは断食をしているわけです。

五つ目は巡礼（ハッジ）です。メッカに行きます。ただし、お金に余裕があれば、行きなさいということです。これは毎年やっています。世界にムスリムは十億人いると言われており、すぐく行きたい人が多いので、一カ国につき行っていい人数が制限されているようです。インドネシアだと何十年待ちだそうです。

「五行」とともに重要なのは、六つの信条「六信」です。

第一に、何をおいても神アッラーを絶対に信じなければなりません。

第二に、マラーイカと言われる天使を信じる。ムスリムたちは、生まれたときから自分に天使がついており、自分がやっていることを天使がいつも書き留めていると考えています。これは一つのエピソードですが、

インドネシアでも、人をだます人間はいるわけです。タクシーに乗ると道をグルグル回ったりする。もちろん、私は得意のインドネシア語を操って「何をだましているのだ」とケンカをします。普通に言ってもダメなら、「おまえは何教だ？」と聞いて「ムスリムだ」と答えれば、「君の天使が、いま書いたよ」と言います（笑）。イスラームでは、この世が終わるとジャッジメント、審判の日があります。神の前で天使が書いた内容を読み上げるそうです。そして、地獄行きの者は左、天国は右と振り分けられる。それもあって、彼らはとたんに反省します。そういうことをやっていいのかどうかわかりませんが、「天使が見ているぞ」と言うとき悪さをやめることが結構あります。

第三に、啓典（キターブ）。誤解されがちですが、啓典は『コーラン』だけではなく、実はユダヤ教とキリスト教の『旧約聖書』や『新約聖書』も一応含まれます。『コーラン』の上では、ユダヤ教徒やキリスト教徒は、啓典の民（アフル・アル・キターブ）といわれ、ムスリムの中では兄弟です。

第四に、預言者（ラースル）。ムハンマドはみなさんご存知だと思いますが、イスラームの預言者はムハンマドだけではありません。イエス・キリストも預言者の一人です。モーセもそうです。神は彼らを遣わされたけれどもそれが完結されなかつたので、「最後にして最大の預言者」であるムハンマドを遣わせたというのがムスリムの考え方です。

第五の信条として、来世（アーヒラ）の存在も彼らは信じています。

そして第六に、定命（カダル）。神がすべてを計画なさっているということです。例えば皆さんがここに来られたのも、私がこうして話をさせていただくのも、ムスリムの方はすべてこれを「神の御心のままに」（イン・シャー・アッラー）と言います。「じゃあ、明日三時に待ち合わせましょう」という言葉に、日本人ですと「はい、三時ですね」と返しますが、インドネシアやイスラームの国の人々は「イン・シャー・アッラー」と言います。来ないこともあります（笑）。

厳格なムスリムが目指す 「イスラーム社会」

しかし、厳格なムスリムが「イン・シャー・アッラー」と言ったときには、ほとんど約束を破りません。また絶対に言い訳しません。彼らは約束をきちんと守ってくれます。すぐくつき合いやすいです。お祈りも何もかもきちんやりやります。お酒もタバコもやらないですし、婚前交渉などもつてのほかです。一切そういうことはしない、真面目な人たちです。私には、大変親しくさせていただいているファンダメンタリスト、原理主義の友人がいます。私は彼のお土産に大変気を使います。彼の子どもにお土産を持っていくときも、リカちゃん人形などは渡せません。彼らは偶像崇拜を禁じており、形ある人形に「お腹すいた？」などと言うことは、ここに魂があることになって、すごく嫌がるからです。

厳格なムスリムである別の友人は、「宗教に無理強いがあつてはならない」と私に説明してくれました。よ

く、イスラームについて「剣か、コーランか。コーランを受け入れなければ、剣をもっておまえを殺す」と脅すイメージが語られますが、それは西側諸国が作った嘘です。『コーラン』には「宗教にはむり強いがあつてはならない」（二章二五六節）と説かれています。ですから、彼らが私に対して「ムスリムになれ」と強制したり、異教徒である私を拒否したりしたことは一度たりともありません。

真の聖戦（ジハード）とは

私たちがよく聞くのはジハード（聖戦・義戦）ですね。ジハードは怖いと思われがちですが、知っておいていただきたいのは、小さいジハード（ジハード・アル・アスガル）と大きいジハード（ジハード・アル・アクバル）の二種類があるということです。小さいジハードは物理的（フィジカル）な戦いで、主に防衛を目的とします。自分たちが攻められたときには、守るために仕返しをしていい。しかし、女性や子どもがいたり、モスクがあるところをやってはいけない。また、決して自分か

ら先にやってはいけない、という教えがあります。

まれに、先制攻撃という意味あいでもありますが、小さいジハードの用法の中では比率は高くありません。自分たちの領土を拡げていくときに先制攻撃をすることは確かにありますが、それよりも自衛目的でのフィジカルな戦いが広く認められています。一方、日本も、その方向に少し変わってきつありますが、アメリカやヨーロッパ諸国は基本的に相手への攻撃を想定しています。先制攻撃までしてしまっている場合もあるのではないのでしょうか。しかしながら、ムスリムは本来は先制攻撃をしないといけないわけです。

そして、大きいジハードが実は大切なのです。このジハードは、つまり精神的な戦いです。より良いムスリムになるための努力であると言われています。先ほどの六信、五行をきちんとやっていく。貧しい人たちの気持ちをきちんとわかっていく。そのようなことをする人が、良いムスリムなのだと言われています。

ムハンマドが圧倒的に不利な状況でメッカ軍に勝ったとされる六二四年のバドルの戦いで、こんな意味の

ことを言ったそうです。「おまえら、よく聞け。この（フィジカルな）戦いに勝ったことはいいことだけれども、それよりも重要なことは、これから我々がより良いムスリムになっていくことだ。それが真のジハードだ」と。ですから、厳格なムスリムは、本当に良いムスリムになるために日々努力することが一番重要なのだと考えているわけです。

ジハードは無差別殺人でも何でもありません。『コーラン』にはこう説かれています。

おまえたちの出あったところで彼らを殺せ。：しかし、彼らがおまえたちに戦いをしかけないかぎり、聖なる礼拝堂のあたりで戦ってはならない。：しかし、彼らがやめたならば、神は寛容にして慈悲ぶかいお方である。：彼らがやめたならば、無法者にたいしては別として、敵意は無用である。

（二章一九一―三節）

あまり言われませんが、イスラームにとっては「許し」

がとても重要です。ムハンマドの言行録の中では、ムハンマドがかつての多くの敵を許した話があります。ですから、相手がやめたらもうやめなければだめだ、先制攻撃もだめだと教えています。また、このような言葉があります。

殺人を犯したとか地上で悪いことをしたとかという理由もないのに他人を殺す者は、人類すべてを殺すのと同等であり、他人を生かす者は人類すべてを生かすのと同等である、とした。（五章三三節）

ですから、イスラームは本来、無差別に殺人をする宗教ではない。自分たちは、そういうことは絶対にしないのだと厳格なムスリムは言います。さらに、こうあります。

喜捨や善行や、人々のあいだの仲裁を勧める者は別だが、彼らの密談の多くは無益なことである。神のみ心になうようにと、このようなことを行

う者には、われらは大きな報酬を与えるであろう。
(四章一一四節)

つまり、戦っている者に「やめよう、みんな仲良くしよう」と仲裁する者には、神があとでごほうびをくださると言っているわけです。ですから、無用な戦いをしたくないのが本来のムスリムなのです。

厳格なムスリムは、テロリストや、いま問題になっているイスラーム国に反対です。彼らは支持しません。いまインドネシアでも反対運動をやっています。彼らによれば、イスラーム国の動きはいわゆるタクフィール(不信仰者宣告)という考え方に基づいています。これは、「信仰なき者は殺してもよい」という考えです。

イスラームには、正統カリフの四代目アリーが、同じムスリムたちによつて殺されたという歴史があります。四代目カリフのあり方に反対して、「おまえのやり方は間違っている」と言ったムスリムが、リーダーであるアリーを殺しました。自分たちと考えが違った者

は殺していいのだ、という考え方をタクフィールといいます。この歴史から考えてみれば、イスラーム国の考えはタクフィール主義ということになります。

イスラーム国によるヨルダンのパイロットの火あぶりの刑(二〇一五年)は、シャリーア、いわゆるイスラーム法に基づいた罰でもありません。イスラーム法で認められるのは、その罪が行われた現場において、その罪を目撃した四人の証人がいる場合であつて、あそこで火あぶりの刑にしたのは絶対間違っている、と私の原理主義者の友人が言っていました。

「異教徒にも敬意を」の教え

私は、その原理主義者の友人が先生をしている学校に寝泊まりさせていただきました。その学校は彼の父親によつて創設され、寄宿舎が併設されています。友人には、「ジャーナリストやリサーチャーも来るけれども、二、三時間いるだけで帰って好きなことを書く。泊まり込むのはおまえが初めてだ」と言われました。ありがたい言葉として受け止めています。

児童や生徒は十二歳から十八歳ぐらいで、朝の四時半ぐらいにちゃんと起きて、毎朝お祈りをします。洗濯機がないので、自分たちで服を洗います。休み時間にはバスケットボールをしますし、私がカメラを向けても、私を異教徒だとわかっていながら笑って応対してくれました。寄宿舎から学校に入る廊下に掲げられた幕には、「学ぶために学び舎に入り、努力のために学び舎を出る」と書かれていました。この「努力」がまさにジハードであるわけです。彼らはどこに行ってもジハードに努め、このように人と会うときにも笑いかける。これも、ムスリムにとって大変重要なことです。ですから、私は彼らとつき合っていて、いやな思いをしたことはありません。彼らは本当に純粹です。ムスリムは一つの皿で食事しますが、異教徒の私にも「お客さんだから、どうぞ食べてください」と勧めてくれました。その心がすごくありがたかったです。

私はあえて「みんないやでしょう。僕は仏教徒だよ、日本人だよ」と聞いてみました。すると一人の学生が「そんなことない。本当のイスラームの教えでは、異教

徒を大切に思わなきゃいけないのだ」と言って、「ハディース」を持ってきました。そこには、目の前をユダヤ教徒の葬列が通ったときに、座っていたムハンマドがすっと立って敬意を表したという話が残っています。それゆえに、ムスリムは異教徒に対して敬意を払わなければいけない、とその学生は教えてくれました。

また「いじめはないの？」とも聞いてみました。イスラームでは「本当のムスリムはお互いに助け合わなければならない。だから強いものが弱いものを助け、弱いものは強いものを敬って生きていくのです」と答えてくれました。だから、彼らはいじめをしないというのです。本当に仲が良さそうでした。

もう一つ、別の原理主義者の友人から、断食明けに「一緒に御飯を食べよう」と誘われたときのことです。私より少し若い人たちが、「カトウ、なんでおまえはムスリムにならないのだ」と聞くので、私は「僕はトンカツも食べたいし、朝は起きられないし」と答えました。私が「僕はムスリムじゃないけど、君たちとこん

なに楽しい時間を過ごして一緒に食べて、それでいいじゃない」と言うと、彼らは本当に悲しそうな顔をして、「でも、カトウ、おまえが死んだら、俺たちはおまえの体を洗ってあげられない。地獄に行ったら助けてあげられない。現世でムスリムになっていないと」と言って、心配してくれたのです。彼らは心配して「イスラームに入らないの?」と言ってくれたわけです。

私は、厳格なムスリムが求める社会を「イスラーム社会」と名づけました。つまり、イスラームの理念を厳格に実践する社会です。聖典主義と言っているいかもしれません。教理的・神学的には解釈が異なる場合もあります。とにかく『コーラン』に書かれていること、「ハディース」に述べられていることを自分たちは一二〇％実行していきたいという主義です。宗教的実践において彼らは決して妥協を許しません。そして、暴力主義、テロリズムを認めません。ただし、自分たちが襲われたときには、自分たちのテリトリーを守るために武器を取るといふスタンスです。

しかし、この「イスラーム社会」というのは極めて

理念的な社会であって、これまで実際にこの世界で実現したとは言い切れないと思います。つまり、原理主義者というのは、この「イスラーム社会」の創出に向けて努力を続けている人たちと考えることができるのではないのでしょうか。

彼らにとっては、イスラームが最善・最高の宗教です。だから、私とは友達になることは可能だけれども、「かわいそう」な存在でしかないのです。共存は充分可能ですよ、というのが彼らの基本的な考え方です。

現実を柔軟に生きる「ムスリム社会」

一方で、この「イスラーム社会」と違う社会もあります。それを目指した方がアブドゥルラフマン・ワヒド（通称・グス・ドゥル）さんです。イスラーム指導者であり、同時に、第四代のインドネシア共和国大統領です。この方は日本でも有名で、ノーベル平和賞に値すると言われるぐらい素晴らしい方です。私も大変親しくしていただきました。

「共存」と「民主」を目指した指導者

彼のムスリムとしてのあり方は、先ほどの厳格なムスリムと少し違います。現在インドネシアの人口の九〇％ぐらいがムスリムですが、イスラームが来る前はアニミズムや精霊崇拜がさかんで、その後、仏教やヒンドゥーが入ってきました。植民地の時代になると、キリスト教の人々も入ってきます。ですから、インドネシアには、イスラームだけではなく様々な宗教があります。またインドネシアは、種族（エスニック・グループ）が三百以上、ローカルな言葉が七百ぐらいあると言われる多様性の高い国です。インドネシア社会はイスラームと他の宗教が共に生きていく社会である、というのがグス・ドゥルの考え方です。

先ほどの「イスラーム社会」では、シャリーア（イスラーム法）を国の法律にするのが本来的な考えです。しかしグス・ドゥルは、それは横に置いておいて、多くの宗教の層が重なり合っているのだから、それに合わせた社会にする、という考えをもっていました。彼は、あらゆる宗教の人を友達にもつ素晴らしい方でした。

一九九八年にジャカルタ騒乱が起きてスハルト大統領が辞めるときに、中華系のキリスト教徒や仏教徒が攻撃を受けました。そのときに立ち上がったのがグス・ドゥルでした。「イスラームはそんな宗教ではない」と言って、彼は一生懸命、攻撃に反対しました。残念なことに、二〇〇九年に亡くなってしまいました。私は本当に悲しかったです。葬儀のあとに、キリスト教、仏教、儒教、ヒンドゥー教の人たちがみんな集まって、彼のためにお祈りをしたほど信望があった方です。

グス・ドゥルが最も重要視したのが、イスラームと他宗教の共存です。数から言うとうインドネシアはムスリムが絶対的多数なので、恐れられる存在になってしまいかねません。だからこそ、自分たち多数派は他の宗教やマイノリティたちを大切にしないといけない、と強く訴えました。ですから、あらゆる宗教の人たちがグス・ドゥルに対して信頼を寄せていたと思います。

彼が第二に重視した点が、世俗と宗教の融和です。もちろん、シャリーアに基づくイスラームもあります

が、それは自分の心の問題である、と彼は言いました。イスラームの国家体制——例えば、サウジアラビアなど——の中で、シャリーアを国の法律にして、それに基づいて人々を罰していくのではなく、心の中にあるシャリーアで罰すればよい、と彼はよく言っていました。

第三に、自由と民主主義への信頼です。共和制の大統領になった彼は、ハンチントンが論じた内容に対して、「イスラームだって自由を大切にするし、民主主義を大切にする」とよく口にしていました。

「イスラーム社会」を指摘す厳格な人たちは、イスラームは常に他の宗教よりも上であり、最高のものであると考えますが、彼は、仏教もキリスト教もどの宗教もそれぞれ素晴らしいと言っていました。グス・ドゥルの思想を受け継いでいる人は、信仰告白をしていれば全員ムスリムと認めます。そして、土着文化も大切に、柔軟な宗教解釈をしていこうと呼びかけます。イスラームは信者の心の問題であって、シャリーアを国法とすべきではない、と。しかし、厳格なムスリムに

とっては、「何を言っているのだ」となるわけです。

「聖人詣で」や「まじない」も

一つの例として、聖人の墓の参詣をご紹介します。ジャカルタにある聖人の墓には全国からバスで信者が来て、その聖人に一生懸命お祈りします。「健康になりますように」とか、「借金が返せますように」とか、「家内安全でありますように」と。そこには、ムハンマドとこの聖人の末裔という男性がいて、彼が祈り始めると、信者たちが一斉にペットボトルの水を差し出します。彼が祈ることによって、それが聖水になり、その水を飲めば健康になり、霊力が得られると言われているからです。他にも、飾り物が売られており、ドアに貼ると守ってくれると信じられています。

また、この近くにあるモスクにも違う聖人の墓があります。外で売られている指輪を買うと、男性がパワーを吹き込んでくれます。マジック、まじないですね。奇跡を起こしてくれる。男性が「お金持ちになりますように」とか「健康になりますように」と祈ってくれ、

みんなが現世利益を求めるわけです。

しかしながら、イスラームではこのようなマジックや、アッラー以外の者に靈力をもたせることは禁じられています。アッラー以外の者に対する祈念や祈願をしてはいけないのです。先祖に対しても、本来的には許されません。なぜ、禁じたのか。社会人類学的に言うと、イスラーム以前のジャーヒリーヤの世界ではこういうことが広がり、人々が惑わされていたからです。それをムハンマドは断ち切ったわけです。それで人々はムハンマドの考えに共鳴して、そこに真実を求めました。これが原理的な教えです。

ですから、厳格なムスリムはこういうことを一切やりません。例えば仏教のお寺では、半ズボンで来る観光客に対して、サルンという腰布を巻いて肌を隠して入るように言うのが普通です。一方、厳格なムスリムは、寺に行くことは構わないけれども、サルンを巻くことはその仏教の神や仏を認めることになるから巻かない。しかし、寺に行くことは決して悪くない、共存はできますよというのが、「イスラーム社会」を目指す

厳格なムスリムの考え方です。

それに対して、グス・ドウルや聖人の墓に詣でる人たちが住んでいる社会を、私は「ムスリム社会」と名づけました。ムスリムとは「帰依する人間」「信者」という意味です。現実の人間である信者が住んでいる社会は、社会的・歴史的な状況を受け入れて現実的に対応していきます。指輪やマジックなど、本来的には禁止されているようなこともしてしまふ。教義を柔軟に解釈して、土着なものも受け入れる。インドネシアでは、もともと精霊崇拜や仏教、ヒンドゥーを信仰する人が非常に多かった。ですから、それに影響されている現実を否定できない。それを柔軟に受け入れて、イスラーム法つまりシャリーアを国法とせず、世俗的な国家体制を取りながらやっていくのもイスラームとしての選択肢ではないか、と考えていく。もちろん、暴力とテロリズムを許さないことは共通しています。

柔軟なムスリムにとって、イスラームと同様に他宗教も素晴らしい。もちろん、「イスラーム社会」を目指す人たちは、他の宗教をひどいものだとは言いません

が、イスラームこそがこの世に遣わされた完璧なものだと考えます。それが、非常に違うところでは。原理的なものから絶対を外れることなく実践していかうとする「イスラーム社会」に対し、「ムスリム社会」つまり信者たちが生きている現実社会では、聖人に対して現世利益を求めてしまう。いろいろなマジックを實際に信じ、シャリーアを国法としないでやっていくのも可能だという社会があるわけです。

イスラームの包括的理解と共存に向けて

以上をまとめると、イスラーム——大文字の ISLAM——を全体として見たときに、おそらく、「イスラーム社会」と「ムスリム社会」の二つが同時に存在しているのではないかと思います。「イスラーム社会」に關しては、本当に存在するのかわかりません。これは解釈の世界なので、「これがイスラームの正しい教えだ」という線引きはどこかでグレー化してしまうことはあると思います。ただ、ここであえて「イスラーム社会」と申し上げたのは、イスラームの理念、原理、

聖典に書かれていることを絶対的に守りたい人たちがいるからです。その人たちを原理主義者と呼ぶことができます。一方、「ムスリム社会」に生きている人たちは、ある意味で自由主義者と呼べるかもしれません。

理念としての「イスラーム社会」と実践としての「ムスリム社会」。その二つが、大きな枠組の中の「イスラーム (ISLAM)」に入るのではないかと考えます。そういうことを理解しないと、宗教の共存も難しいだろうし、イスラームを理解していくことも難しいだろうと思います。これが、イスラームを包括的に理解することに通じます。

真の原理主義はテロを認めない

では、いわゆるテロリストはどちらの社会にいると思いますか？ テロリストは、「ムスリム社会」にいます。本当に厳格にイスラームを信仰していかうとする人間は、テロリストになり得ません。しかし、とくに西側諸国の人々は、原理主義を何かテロリストとイコールのように考えてしまいます。テロリストは「ムスリ

ム社会」にあつて、政治的・経済的・個人的な状況のなかで、イスラームを思うがままに解釈します。ですから、「ムスリム社会」にはいい面だけでなく、マイナース面も実はあります。

しかし、本来的なイスラームの聖典主義からいくと、テロはできないわけです。「イスラーム社会」を望む人間も「ムスリム社会」に生きる人間も、テロリストたちに対しては、やめてほしいと思つているし、さまざまな努力をしていることも、私たちは知らないといけません。それを知ることによつて、「イスラーム≡テロ」というイメージをもたないようにしなければいけません。これが、イスラームと共存していくための一つのキーになるのではないかと思います。

最後に、「イスラーム社会」のムスリムが言つている厳格なものが、果たして実現可能かどうかを考えたいと思います。インド系イギリス人で、ノーベル文学賞を二〇〇一年に受賞したV・S・ナイポールはこう言つています。「宗教的あるいは文化的純粋性などというものは原理主義者の空想にすぎない」(「イスラーム再訪

上」斎藤兆史訳、岩波書店)。原典通りの教えを一〇〇％実行するのは難しいのではないかと、というのがナイポールの考えです。だからこそ、「ムスリム社会」のようなものが出てくるのではないかと思います。

人の往来がさかんなグローバルな時代にあつて、私はイスラームとの共存は十分に可能であり、それこそが持続可能な人類社会をつくり、宗教のあるべき未来をつくるのではないと思つています。

質疑応答

【質問者A】「イスラーム社会」では信仰を無理強いはしないというお話でしたが、イスラームを信仰している人が他宗教に改宗する自由は認められているのでしょうか。また、親がイスラームを信仰していて、子どもが仏教を信仰したと言つた場合、認められるのでしょうか。

【講師】ムスリムがイスラーム以外に改宗したい場合は、厳格な意味で言うところの死刑に値するくらい悪いこととされると思います。しかし現実には、改宗することは極

めて生まれです。インドネシアでは、私を知る限りありません。一方、ムスリムになることは自由ですが、「アッラー以外に神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒である」と唱えることが前提となります。私の知人も、親がカトリックで自分はムスリムになったとか、家族内で宗教が違う人もいます。

【質問者B】中近東諸国を旅して、サウジアラビアと比べてトルコは宗教的に非常に緩やかな気がしました。国ごとで違いはありますか。また、豚肉は絶対食べてはいけないとされていますが、その理由を私の親しいバングラデシュ人に聞いても「預言者が言ったから」と言うだけで、的確な答えがよくわかりません。もしおわかりでしたら教えてください。

【講師】トルコも大変面白く、世俗的なイスラームの国として、インドネシアと比較されることが多いです。ご観察のとおり、イスラーム法で統治するサウジアラビアよりも、トルコの社会は世俗的な色が強いです。

豚肉に関しては諸説あります。例えば、七世紀の阿

ラビアでは豚が金や銀と同様に大変貴重で、それが争いのものになるので、不浄で悪いものだと言ってあえて価値を下げたのではないかという人もいます。また、暑いところで豚肉が悪くなると疫病が流行るから禁止したのではないかという説もあります。そうすると、鶏肉でも何でも同じだと思いますが。とにかく、皆さん、本当に豚肉は食べないですね。「(飲酒は禁じられているが)ワインは飲んでもいい」という「ムスリム社会」の人はいますが。

【質問者B】日本で市販されている牛肉や鶏肉なども食べませんか。

【講師】それは、許された食べ物(ハラール・フード)ではないからです。鶏肉も牛肉も、「アッラーの御名において」と言って、一番太い血管を切って殺したものでなければハラール・フードになりません。いまスーパーで売っているものはそういうかたちで殺していないので、本来は食べられない。ですから、その人はすごく厳格な方だと思います。インドネシアのムスリムでも、ハラール・フードでなくても「鶏肉だから、いいや」

という人はたくさんいます。お酒はダメなはずなのに、みりんが入ったソバも「沸騰させればアルコールが消えるから大丈夫」と言って、食べる人もいるわけです。もしかしたら、そういう人のほうが多いかもしれません。

【質問者C】イスラームの方々には自殺についてどのように考えているのでしょうか。自殺を考えてしまう傾向にある人たちが、『コーラン』を通じて希望をもち、自殺を思いとどまることは実際にありますか。また、周りほどのようにサポートしているのか教えてください。

【講師】これは大学のゼミでも、よく話題になります。インドネシアと日本では自殺の捉え方が違います。日本では、自殺を試みて、特定の時間内に死んだ場合を自殺とみなし、例えば、意識不明になってから三日後に亡くなった場合は自殺に数えない場合があるとも聞いています。そういう数え方であっても、大体、年に三万人ぐらいの自殺数になるとインドネシアの人に言

うと、本当に驚かれます。

彼らには信じられないことです。キリスト教でもイスラームでも自殺は許されません。ムスリムによれば、自分がつらいのは試験であり試験だからなのです。神が全部ご計画なされて、その中で自分が本当にできるかどうか試されているのだ、天使がいて、自分のことを書いてくれているのだ、と考えるので、自ら命を絶つことはありません。実際は少数ありますが、本当に大ニュースになるぐらい少ないです。

二〇一一年三月の東北の大震災のとき、ちょうど東京で学会があつてインドネシアの方も来ていました。一緒に御飯を食べていて、震災の三日後でも大きな余震が続いていました。私は、こわくて仕方がなかったので、ドアを開けて逃げようとしたのですが、二人のインドネシア人はじっとしていました。神に祈っていたのです。「こわくないの?」と言ったら、「いま神様にお願ひしているから」と答えるわけです。

いま、つぶれてしまうかもしれないが、それも神の計画。大変なもの神の計画。ですから、どんなに大変

なことがあっても、何とか自分で神様にお祈りする。
大変なことがあると、お祈りの時間が長くなります。
その意味で言うと、自殺を防ぐ一つの機能としてイス
ラームが働いているのではないかと思います。

(かとう ひさのり／中央大学教授)

※科学研究費(C)16K02004の助成を受けている。